

ラ フォレ セ ラ ヴィー 森こそ命



La Forêt, C'est la Vie !



今年も難民キャンプでの環境保全活動に、日本人・チャド人共に力を合わせて精一杯取り組んでいきたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひいたします。

(チャド共和国、10月)

皆様、新年明けましておめでとうございます。緑のサヘルが1991年3月に設立されて以来、丸15年が経ちました。この間、20人を越える日本人スタッフが現地で汗を流しましたが、その活動は常に不安定な食糧事情と治安状況という制約を受けながらのものでした。緑のサヘルは住民の参加を活動の基本としているため、生活状況の悪化は活動の進捗にダイレクトに影響しました。チャドでは2度に亘る飢饉のダメージのため、その後の数年は生活の立て直しに集中せざるを得ませんでした。ブルキナファソでも出稼ぎのため、年々活動を担う住民を確保することが難しくなっています。

今では新たな年を迎えるたびに、その年の現地の降雨や収穫、治安を懸念し、少しでも良い状況となるようにと祈ることが恒例となっていました。国連は今年2006年を「砂漠と砂漠化に関する国際年」に指定しています。ここ数年、チャド、ブルキナファソとも降雨の不足やバッタの発生によって、農業生産が大きな被害を受ける年が続いています。今年こそは現地の方々が平穏のうちに日々を過ごし、心にゆとりを持って環境に目を配ることが出来る年になってほしいと、心より願って止みません。

2006年は「砂漠と砂漠化に関する国際年」です

国連は今年 2006 年を「砂漠と砂漠化に関する国際年」に指定しています。そこで、これまでの世界の砂漠化に対する取り組みと、緑のサヘルの活動を簡単にまとめてみました。主な出来事のみを抜書きした大まかなものですが、関心をお持ちになるきっかけになれば幸いです。

1968～73 年	・ アフリカ・サヘル地域で大旱魃があり、砂漠化が世界の注目を集め始めました。
1972 年	・ 国連人間環境会議。世界各国の人々が環境問題解決のために積極的に努力し、行動すべきことが宣言されました。また、これを受けて国連環境計画が設立されました。
1977 年	・ 国連砂漠化防止会議。世界が砂漠化防止に取り組むべきことが決議され、「砂漠化防止行動計画」が採択されました。しかし各国の足並みは揃わず、その後も砂漠化は進み続けました。
1983～84 年	・ 大旱魃がアフリカを襲い、多くの国で飢餓や環境難民が発生しました。
1991 年	・ 国連環境計画が、「砂漠化の影響を受けている土地は地球上の全陸地の 25%（約 36 億 ha）、影響を受けている人は 6 人に 1 人（約 9 億人）」「砂漠化・土地劣化問題は最も深刻な地球環境問題」と報告しました。
3 月	・ サヘル地域の環境を保全し、住民生活を改善することを目的に、緑のサヘルが設立されました。
1992 年 2 月	・ チャド共和国南部のバイリ地域で、環境保全プロジェクトがスタートしました。
6 月	・ 国連環境開発会議（地球サミット）。脆弱な生態系の管理、砂漠化と旱魃防止対策が採択され、砂漠化対処条約の必要性が指摘されました。
1993 年 3 月	・ チャド共和国北部のトゥルバ地域で、環境保全プロジェクトが開始されました。
1994 年 6 月	・ 第 5 回砂漠化対処条約の政府間交渉委員会で砂漠化対処条約が採択されました。
10 月	・ 砂漠化対処条約署名式典。日本を含む 86 か国（EC を含む）が署名しました。
1996 年 11 月	・ ブルキナファソ北部のタカバングウ地域で、土壌保全プロジェクトが開始されました。
12 月	・ 砂漠化対処条約が発効しました。
1998 年 10 月	・ 日本が砂漠化対処条約を受諾、139 番目の締約国となりました。
2004 年 4 月	・ チャド共和国東部のアベシェ地域で、難民キャンプとその周辺村落を対象とした環境保全プロジェクト（国連難民高等弁務官事務所との提携事業）に着手しました。
	・ ブルキナファソ北部のタカバングウ地域で、住民を対象とした砂漠化対処のための技術移転プロジェクト（環境省・地球・人間環境フォーラムの委託による事業）が開始されました。
11 月	・ ローカル NGO、緑のサヘル・チャドを立ち上げ、開発支援事業を引き継ぎました。
—2005 年 11 月現在、締約国は 190 か国と EC となっています。—	



(チャド担当； 佐藤裕美)

アベシエ地域環境保全事業； UNHCR パートナー事業

(2005 年 4 月～12 月)

2004 年よりチャド共和国アベシエ地域にて、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）主導の元開始された、スーダン難民支援事業に緑のサヘルが参加してから、約 2 年が経過しようとしています。2 年目にあたる 2005 年度は、事業全体の主旨が、緊急支援から持続的な支援に移行しつつある状況を汲み、「難民と地域住民の共存」ならびに「継続可能な環境保全」を目標に掲げ、過去培ってきた技術をいかし、現地スタッフと共にプロジェクトの参画に臨みました。

1. 植林

1-1 苗木生産（写真右）

2005 年の 1 月より、チャドの東端、スーダンとの国境に近いアドレ地域に設置した 3 か所の育苗所において、合計約 60,000 本の苗木生産を行ないました。地域に既に生育している樹種を中心に 15～17 種類を選定、主にアカシア・セネガル、アカシア・アルビダといった馴染みのある耐乾性の強い樹種から、グアバやマンゴー、カシューナッツといった果樹などに及びました。各育苗所での苗木生育状況は概して順調で、いずれの樹種も発芽率が 8 割以上と、育苗所を管理する現地スタッフの渾身の努力のお陰で、高い生産性を保つことができました。



1-2 苗木配布・植栽（写真左）

6 月頃からの雨期の到来に伴い、植栽に適する程に成長した苗木の植栽が始まりました。植林に関する緑のサヘル単独の事業では、防風林の植栽、植生保護区の設置という 2 つのプロジェクトを行なっています。その他、WFP（世界食糧計画）や UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）、関係諸団体（NGO や地元の有志など）との連携を得て、キャンプ地内や地元住環境への植林活動も行ないました。

10 月末時点では、接木用に来年度へ繰り越す果樹以外、ほぼすべての苗木が植栽されました。



***防風林………** ファルシャナ・キャンプとトレギン・キャンプの 2 キャンプにおいて、乾燥した強風（ハルマッタン）による被害を軽減するために、キャンプの風上方向に植林を行ないました。最終的には、長さ 200m の樹木の列が 3 列設置される予定です。尚、今年においては各キャンプ地に 100m 前後の植林が完了、緑のサヘルと UNHCR の意向としては来年も引き続き行なう予定です。

***植生保護区………** ファルシャナ・キャンプとアドレ市街地より、それぞれ約 5km 程離れた場所に約 4ha の土地を UNHCR と役場の許可を得て確保、植生保護区と特定しました。「今そこにある緑を減らさない」ことを前提に、植林などを行ない、地域住民とともにメンテナンスをすることで、近い将来は緑豊かな地区にすることの実現化を図ります。環境を保全することの大切さを、現地住民や炊事用の薪を採取しにやってくる難民に、より深く理解してもらうことを目的としています。防風林と同様に、来年も引き続き植栽を行なう予定です。



2005年9月末日の調査時に撮影。7月に植えたアカシアセネガルは、100cmを越えた。

1-3 追跡調査 (写真左)

苗木を配布した周辺村落において、今年植栽した苗木の管理方法の講習会、並びにその後の成長具合や来年度の植林希望樹種の調査などを行ないました。

なお、今年の雨季に植栽された苗木の成長具合は軒並み順調で、アドレ地区においては10月末日の調査によると植栽した苗木の8割以上が、ファルシャナ・キャンプとトレギン・キャンプにおいては、7割以上が順調に生育しているということです。キャンプ周辺においては、家畜や子供のいたずらなどによる被害がみられるとの報告を得ています。住民をはじめ、参加者からの来年への期待も大きく、総じてマンゴーやグアバといった果樹の人気の高いことがわかりました。

2. 改良カマドの普及 (写真右)

キャンプ地では、20万人以上の難民が、毎日、炊事のために薪を使用しています。しかしながら薪の採集にあたって、成木の伐採等による環境破壊や、薪集めに出かける際に女性が暴行に会う（炊事は女性の仕事ということもあり、通常燃料の確保も女性が行ないます。薪を集める場所は人気のない荒野である場合が多く、危険を伴います）といった様様な問題が生じています。切実に感じるのは、環境問題はエネルギーを確保するという日常的な行為から生じうることです。

少しでも薪の消費量を抑えるために、身近な資材を利用して作成できる改良カマドの普及を行ないました。ファルシャナ・キャンプとブレジン・キャンプ、トレギンキャンプでは粘土製改良カマドを、ジャバル・キャンプでは粘土製改良カマドと金属製改良カマドの普及を、他団体と協働するなどして行ないました。

改良カマドの設置と使用を促すために、カマドを実際に使用している家庭には薪を配布しました。（一部暴行事件が多発していたブレジン・キャンプでは、UNHCRの指導の元無償で薪を配布。）

講習会実施に際しては、環境保全が生活に直接的に関わることを説明した後に、作製デモンストレーションを行ないました。また、難民による今後の自主的な普及を促進すべく、各キャンプでは他団体との折衝を経て普及の仕方を工夫しています。



3. 家畜死骸処理

難民流入当初、遠路の避難行により疲弊した上に、キャンプ地においても餌・水が不足していたため、難民が連れてきた家畜（ロバ、ヒツジ、ヤギ、牛、馬、ラクダ）の死亡が相次ぎました。今年はプロジェクトに参画して2年目ということもあり、去年に比してさほど多くの死骸が出なかったのですが、引き続き死骸処理を行ないました。

放置されたままの死骸は悪臭を放ち、ハエ等の発生源となり衛生上の弊害となるだけではなく、土壌汚染をも引き起こす可能性があるため、乾燥した死骸は焼却処理し、死亡間もない死骸は消石灰による消毒と埋葬を行ないました。なお、実施期間は2005年を通して行なうことを予定しておりましたが、死骸数の減少により10月以降は行ないませんでした。

＊2006年1月＊

2005年の12月より、2つの育苗所で苗木生産が始まりました。2006年1月末日現在では全体のほぼ半数 25,222 本分の播種が完了しており、最終的には 49,054 本の苗木を生産する見込みです。

尚、2005年後半より、私達の活動地域とその周辺地域にて、一時的ではありますがチャド政府軍と反政府軍の衝突や、スーダンからの盗賊集団（ジャンジャウィード）の進行などがみられるなど、一時的な治安状況の悪化が伺えるようになりました。これからはスタッフとの情報交換をより密にするなどして、安全確保を最優先にし活動を継続していく所存です。

東の国境沿い、キャンプの西

昨今の転職ブームに煽られて一念発起し、国際協力業界は未経験でしたが緑のサヘルの門戸を叩いて一ヶ月後——なまじっかアフリカ初上陸の身ではありましたが、チャドのアベシエに派遣されて参りました。

待遇やお給料は、一般企業に比べると、、、、というか比べものにならない程に非魅力的ではありますが、「アフリカの難民キャンプで、国連関係の組織やビッグな NGO との協同事業」「環境保全」というスケールの大きさは、日本にいてはそこそこお目に掛かれないものであります。さすがに新たな勤務先がアフリカで、尚且つ最貧国のひとつであるチャド、更に待遇もなかなか厳しいという NGO からの参画というケースは、目下資本主義まっしぐらの日本では一般的に考えて良くも悪くもかなりレア、と言えるかも知れませんが、それだけに現地でのお仕事を通して得たものは、何にも替えがたく、また感慨深いものでした。

幸運にも実生活を営む上では、致命的な問題（マラリアと原因不明の腹痛にはさすがに堪えました）に悩まされることもなく、現地の習慣にもすんなりなじめたという点にあつては、私自身の原始的なキャパシティを実感することができました。滞在期間が4ヶ月間ということで、あまり長逗留できなかったことが少々心残りでしたが、さすがにお仕事の内容が結構大変だったので、「はじめの一步」にはちょうど良かったかもしれません。

現在は帰国し、東京事務局では主にチャドとの連絡窓口を担当しております。アベシエプロジェクトをはじめ、新生 AGS チャドとの連携の強化も図って参りたい所存です。

(佐藤 裕美)



アベシエ事務所 スタッフ紹介

小田 桐 真子

ブルキナファソにて青年海外協力隊稲作隊員を経験後、フランスへ留学。帰国後すぐに緑のサヘルに参加し、2005年9月末よりアベシエ事務所の調整員を務めています。持ち前の元気と、仕事への情熱は誰にも負けない津軽美人(?)。



富田 勝義

ニジェールにて青年海外協力隊野菜隊員を経験。JICAの国内協力員を経て、愛・地球博にてEXPOインフォメーションセンタースタッフ2005年12月より、アベシエ事務所に派遣。温和で人がよく、ラーメンと音楽をこよなく愛する名古屋紳士。



活動報告2

ブルキナファソ



(ブルキナファソ担当；水真 洋子)

2004年、プロジェクト実施地であるタカバングゥ村を中心とする地域では、降雨の不足と巡礼バッタの襲来によって、穀物や作物が壊滅的な被害を受けました。2005年に入ると食糧の不足が次第に顕著になり、村人はその日の糧を得ることに必死になり始めました。こうした状況は、住民の参加を基本とする緑のサヘル活動にも影響を及ぼし、村人の負担を考えてほとんどの活動を変更・縮小せざるを得ませんでした。幸いにも2005年雨季の降雨は順調で、穀物収穫も平年をやや上回り、胸を撫で下ろしています。

ブルキナファソ・プロジェクト（2005年4月～12月）

1. 育苗所運営

緑のサヘルは1997年にタカバングゥ村内に育苗所を設置しました。この育苗所は2004年に独立し、現在は緑のサヘルが使用する苗木だけではなく、広く一般からの注文も受け付けています。しかし、育苗所の完全自立にはまだ時間が必要で、緑のサヘルは一部資機材の支援と運営・技術に関するアドバイスを継続しています。

今期はタカバングゥ村が属するウダラン県の森林局、緑のサヘル、個人からを合わせ、19樹種、約5,000本の苗木生産依頼がありましたが、一部樹種の播種の遅れや育苗技術者の出稼ぎ等もあり、最終的に約700本の不足を生じてしまいました。



2. 植林活動支援

当初の計画では、タカバングゥ村内の一般家庭や診療所を始めとする公共地、村内を流れるゴリア川畔の4か所、村外の荒廃地1か所に計約1,400本の植林を行なう予定でした。雨季を迎えた7月末には川畔の2か所に計450本の苗木を植栽しましたが、8月以降は村人が穀物栽培や出稼ぎ、また政府森林局や他団体による植林活動等に忙殺されたため、植林の適期が過ぎてしまいました。

植林活動の母体となっている青年グループと検討した結果、無理な植栽による苗木枯死のリスクを考慮して今期の植林活動を打ち切り、未使用の苗木は2年苗にして2006年に植栽することとしました。



3. 穀物支援

これまで緑のサヘルが支援を続けて来たタカバングゥ村の穀物銀行は、青年グループと女性グループがその活動母体となっていました。しかし、2004年の農業生産が壊滅したことによって恐慌対策委員会が設立され、食糧・飼料・種籽の不足は村全体の問題となりました。

このうち食糧の調達に関しては、村の自助努力と他団体の支援によって目途が付いたため、緑のサヘルは恐慌対策委員会と協議の結果、4月に委員会と村内3地区に対して、今期



播種用の種籾の購入資金の貸出しを行ないました。穀物収穫後に返済された資金は、今後の穀物銀行の活動を強化する資金の一部となる予定です。

4. 野菜栽培支援

タカバングゥ村およびその近隣の計7市町村で野菜栽培を行っている組合に対して、組織の能力強化を図る研修を行ないました。

まず、各組合の執行部（代表・副代表、事務責任者、会計担当・副担当、情報責任者）に対して、組織としての役割、各責任者の役割、組織の運営について研修を実施しました。その後さらに理解を深めるために、組合員・組合資材の管理、資金の運営、レポート・外部文書の書き方、会計文書の取り扱い等の研修も実施しました。



5. 在来技術移転

（環境省－地球・人間環境フォーラム委託事業）

砂漠化防止を現実的・効果的に進めるために、先進国の技術を押し付けるのではなく、地域住民により自らに近い技術を選択してもらい、その実施を支援するプロジェクトです。住民が視察調査と検討を経て選択した技術は、男性グループが荒廃地回復と畜耕、女性グループが石鹼作りと裁縫で、それぞれの技術ごとに希望者からなるトライアル・グループを作り、その経過や結果、成果を一般村民に広めていく予定となっています。



荒廃地回復グループは5～11月、穴掘りや石積みを用いての穀物栽培を実施、畜耕グループも6～11月、ロバの牽引による耕運機を用いた穀物栽培を実施しました。女性グループの活動は農閑期に行なわれるので、石鹼作りは6月に油抽出研修、12月に油抽出と香料栽培、裁縫は5月に視察旅行、12月にミシン使用研修を行ないました。



ワガドゥグ事務所 スタッフ紹介

利川 豊

2001年に緑のサヘルに参加し、2005年3月までブルキナファソ・プロジェクトの調整員を務めました。その後、一時期緑のサヘルを離れましたが、2005年6月より、チャド共和国アベシエ地域において国連難民高等弁務官事務所との提携で実施されている環境保全プロジェクトの調整員として復帰、10月より再びブルキナファソで頑張っています。緑のサヘルの現地駐在スタッフは、これまで延べ20人を越えていますが、ブルキナファソ、チャドの両国で調整員を務めたのは利川だけです。寡黙ですが思慮深く、同僚や現地スタッフにとっては、「頼れる存在」です。



ブルキナへの里帰り

水真 洋子

1月31日、私は1年2ヶ月ぶりにブルキナファソを訪れました。今回の目的はプロジェクトの形成調査で3週間の予定です。緑のサヘルは1996年からブルキナファソで活動を開始しましたが、実施地は主に北部の乾燥地帯、ニジェールとの国境にほど近いタカバングウ村とその周辺の1地域だけでした。活動開始から10年を迎えた今、生活を改善するために植林とその技術移転を必要としている地域や、活動のパートナーとなる現地NGOを改めて調査することが今回の目的です。調査は首都ワガドゥグから100km前後の距離にある、ヤコ、コングシ、カヤ、クドゥグの4地域で行なっています。

緑のサヘルに参加する以前、私は青年海外協力隊の植林隊員としてブルキナファソ環境省地方局で活動していました。2年間自分なりに工夫しながら活動したのですが、なし得なかったことがたくさんあり、それに対する再チャレンジの気持ちが、緑のサヘルで働くきっかけとなったといっても過言ではありません。

2004年12月、協力隊員として2年間の任期を終え、飛行機で飛び立つとき、「次にこの地を踏む時は、いつなのだろう。その時はどういう立場になっているのだろう。」と考えていました。こうして緑のサヘルのメンバーとしてブルキナファソの地を踏むことになるとは思っていませんでした。今回、ワガドゥグ空港に降り立ち、むーっとしたブルキナ独特の空気と懐かしい現地語モレ語が飛び交うのを聞いた時、心からうれしくて体が震えました。

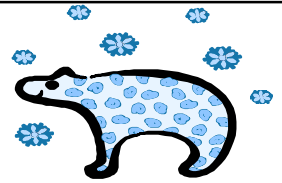
調査は思ったよりも順調に進んでいます。同国に赴任中のスタッフの助けをかりつつ、各調査地を2日間の日程で回っています。各調査地の中でも特に趣深かったのは、隊員時代に活動していたクドゥグへの訪問でした。隊員時代、私は「テンポコ」（「大地の少女」という意）という現地の名前で呼ばれていたのですが、同僚たちは「テンポコ」が帰ってきたことをとても喜んでくれました。自転車やバイクで活動していたテンポコが4駆の車で戻ってきたとあって、「テンポコ、出世したなあ」としみじみほめられた時は、返答に四苦八苦しました。

今回の調査では同僚の森林官たちの協力が大きな力となりました。訪問先で案内してくれる人を手配してもらったり、熱心に活動している現地NGOを紹介してくれたり、非常に協力的に動いてくれました。今回痛感したことは、ブルキナファソの人々の多くが環境問題に対して関心が強く、機会があれば自分たちで環境をより良くしたいと熱望している人が数多くいるということです。ただ、資金不足が原因であきらめざるを得ない人たちが多いようです。

緑のサヘルとしても、積極的に活動している全ての現地NGOに支援できればいいのですが、とても全部というわけにはいかず、今後、支援対象を選定する作業は、非常に厳しく大変なものになることが今から想像できます。しかし、自らの国の未来に対して前向きに取り組んでいる人たちに接するたびに、この国の将来が心から楽しみになり、また、緑のサヘルとしてもできる限りのことをやりたいと強く思うのです。

活動報告3

国内活動



帰国報告会（2005年9月22日）

2005年4月から2005年8月31日までの5ヶ月間にわたって、チャド共和国のアベシエに赴任し、国連難民弁務官事務所（UNHCR）との提携事業である環境保全プロジェクトの現地調整員を務めていた、竹越久美子の帰国報告会が開かれました。

当日は、現地で撮影された写真や地図などを用い、難民キャンプの様子や緑のサヘルの活動などを説明した後、参加者との間で活発な質疑応答が行なわれました。また、報告会の最後にあたり、国連難民高等弁務官事務所の日本支部からもお言葉をいただくなど、大変有意義な報告会となりました。



日本ではなかなか知る機会のない現場の状況説明に、熱心に耳を傾ける参加者の方々（写真中央 ホワイトボード左：竹越）



グローバルフェスタ
緑のサヘルの展示ブースの様子
（写真上）

2005年10月1日（土）と2日（日）の2日間にわたり、東京の日比谷公園にてグローバルフェスタが開催されました。NGOやNPO団体をはじめ、外務省や独立行政法人などの共催のもと、200を越える団体が出展いたしました。

開催当日は、両日合わせて75,000人（2004年度は45,000人）の来場者が会場を訪れ、参加団体の活動紹介コーナーや、ブース内に展示されている民芸品を見学・購入したり、アジアやアフリカ各国の料理を楽しんだり、大いに賑わいました。

緑のサヘルでは、サヘル地域での活動をパネルなどで紹介する一方、民芸品やカレンダーの販売も行ないました。当日駆けつけてくださったボランティアの皆さんも、お客さんからの質問に積極的に対応するなど、交流の輪を通して私達の活動が理解されていくことが伺え、大変嬉しく思いました。

2005年度にはお越しできなかった方々とも、今年は是非とも会場でお会いできることを楽しみにしております。

★★ 2005年度 参加イベント（9月～12月）★★

10月1日（土） 2日（日） グローバルフェスタ（日比谷公園）

15日（土） 16日（日） 江東区民まつり（都立木場公園）

12月3日（土） 4日（日） NPOまつり（代々木公園）

23日（金・祝） YMCAクリスマス・フリーマーケット（YMCA専門学校）

◎当日はたくさんの方にお越しいただき、盛況のうちにおさめることができました。

ご協力ありがとうございました！

♪ 4月には代々木公園で行なわれるアース・デイに参加する予定です。

ご期待ください ♪

東京事務局が移転いたします。

2006年2月24日より、東京事務局の住所が以下のように変更になります。

〒101-0035 東京都千代田区神田紺屋町1-6

田澤三ビル 3F

どうぞよろしくお願いいたします。☀

一足立さつき&赤坂達三&斎藤雅弘一

スーパートリオ チャリティコンサート

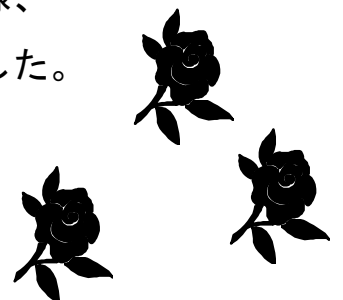
2005年5月8日(日)、大阪・池田市の池田市民文化会館アゼリアホールで、ソプラノ歌手の足立さつきさん、クラリネット奏者の赤坂達三さん、ピアニストの斎藤雅弘さんによるチャリティコンサートが催されました。日本を代表するアーティスト御三方による「夢の共演」ということで、会場には1,000人を越える観客が詰め掛けました。観客席には小・中学生の姿も多く見られる等、これまでにない幅広い年齢層の方々が集まったコンサートで、ステージ上の3人の息の合った歌と演奏、軽妙洒脱なトーク、絶妙な掛け合いに、皆大喜び。音楽の楽しさを十二分に味わい、堪能した2時間でした。

2003年の幸田聡子さん、04年の錦織健さんによるチャリティ・コンサートに引き続き、今回も「アフリカの砂漠で木を植えている日本青年を支援する会(代表：坪居寿美子さん)」と「(財)いけだ市民文化振興財団」が主催の労を担って下さり、池田市、池田市教育委員会、在大阪チャド名誉領事館各位の後援と日チャド協会の協賛を頂きました。このコンサートの収益金100万円は後日緑のサヘルに寄附され、現地における育苗や植林を始めとする環境保全活動に活かされました。また、コンサート終了後に行なわれた関係者による打ち上げの席上、この日の主役を務めて下さった「スーパートリオ」の皆様、主催の「アフリカの砂漠で木を植えている日本青年を支援する会」の皆様を始め、コンサートに携わって下さった多くの方々からお励ましの言葉を頂きました。緑のサヘルスタッフ一同、深く感謝すると共に今後の活動に大きな力を頂きました。



当日は、同会場にて緑のサヘルの活動紹介も併せて行われました。

足立さつきさん、赤坂達三さん、斎藤雅弘さん、この日のために大変なご苦勞をされた主催者の皆様、後援・協賛頂いた皆様、会場にお運び下さった皆様、本当にありがとうございました。



足立さつき&赤坂達三&斎藤雅弘の
スーパートリオ
チャリティコンサート
日本を代表する
アーティストの競演

プログラム
スウィングスキー・ウィーン狂歌の街
サンダーダンス・オーボエ・ソナタ
フリヤ・メロウの囃り
冬のソナタ メドレー
トスティ・アブルツェのギター・メロ
カッパ・イシ・歌謡「赤い靴と白靴」より メドレー
日本の歌コーナー：初音、この道、鐘が鳴ります
マリヤ・カラスに捧げる歌謡「カルメン」メドレー
ジュディ・カーランドに捧げるメドレー
デュエター・歌謡のメドレー

■前売券は下記でお求め下さい
■池田市民文化会館
TEL 072-761-8811
■アフリカの砂漠で木を植えている日本青年を支援する会
TEL/FAX 072-761-0508

2005年
5月8日(日)
13:30開場
14:00開演
池田市民文化会館
アゼリアホール
前売券3,500円
当日券4,000円
全席指定

■お問い合わせは
・池田市民文化会館 事務局(072-761-8811) (火曜日受付)
・アフリカの砂漠で木を植えている日本青年を支援する会

ありがとうございました

【 新規会員のみなさま 】

桂井 武／曾根田 太郎

【 継続会員のみなさま 】

土屋 絢子／深井 英之／宮崎 英寿／高橋 聖子／遠藤 保子／吉川 善明／太田 弘子／佐野 のぶ／松本 仁一／石崎 さかえ／古川 フミ子／藤田 忍／国岡 裕子／鎌田 信男／鎌田 智樹／永田 ひろ子／杉本 和／加藤 和雄／鈴木 幸子／金 明希／村本 晶子／宮田 春夫／今野 和子、進／千葉友の会／藤巻 晴行／畠山 修

【 ご寄付を頂きました。ありがとうございました。 】

天野 洋子／斉藤 せい子／大原 緑／太田 弘子／メルセス会修道院／瀧井 宏臣／本田 敬子／徳山 高光／山田 静子／村上 和代／富田 むつみ／石崎 さかえ／小林 伸張／丹 邦子／内藤 篤／大原 緑／山本 淑子／大橋 邦雄
加藤 正博／碓井 道子／志治 美世子／水真 陽一／宮本 政子／本多 れい子／曾我 節子／ショファイユの幼きイエズス修道会
／土屋 絢子／小枝 清子／庄司 梨沙／須藤 さい／榎本 みつ枝／里井 文子／西宮聖ペテロ教会／村本 晶子／小野瀬 裕義
／宮田 春夫／宮本 秀子／畠山 修／大津友の会 渡辺俊子／庄司 澄枝／援助修道会 管区本部／正月 ますみ／千葉友の会／渡邊 かをる／富士ウェルテック株式会社／株式会社 エフエスティ／小川 あい子／高木 真味子

【 助成団体からの助成金 】

日本経団連自然保護基金／社団法人 国際農林業協力・交流協会／財団法人 国際緑化推進センター／財団法人 イーオン環境財団
／毎日新聞社会事業団／財団法人 地球市民財団／特定非営利団体 アーユス仏教国際協力ネットワーク

(敬称略、入金順)

上記は2005年9月1日から2005年12月31日までにご支援いただいた方の芳名であり、2006年1月1日からご支援いただきました方につきましては次号の掲載とさせていただきます。また、お名前の公開を承諾された方のみを掲載いたしております。あらかじめご了承下さい。

お話を聞いていただいて、ありがとうございました。

♪事務所を訪問してくれた中学校のみなさん

- ・海津市立平田中学校 (05年9月15日)
- ・志木市立志木中学校 (05年12月1日)
- ・足立区立第四中学校 (06年2月10日)

*

*

♪講演させていただいた学校・団体

- ・下橋中学校 (05年11月2日；日本青年館)
- ・JICA 西アフリカにおける女性地位向上研修会 (05年11月24日；JICAつくばセンター)
- ・湘南学園 (05年12月8日)

*

♪事務所訪問や講師派遣のご依頼は、事務局まで
お気軽にお問い合わせ下さい。♪

インタビューさせて
※ありがとうございます※



竹内 由貴子さん
(日本外国語専門学校
1年生)

緑のサヘルで事務局ボランティアをさせていただいている竹内由貴子です。事務局のなかでは、水真さんの妹分で行こうと考えています。最近ボランティアの仕事の他に、アフリカの環境の勉強もさせてもらっています。“砂漠化”という言葉くらいしか知らない私でしたが、いろんなことを知っていくのがすごく楽しいです。アットホームな雰囲気なので、のんびりわいわいとやっています。

おしらせ

書き損じ葉書で国際協力しませんか？

書き損じ葉書、使わなかった古い年賀状などを大募集しております。1枚でもかまいません。どうぞ緑のサヘルにご寄付下さい。いただいた葉書は、新品と交換もしくは換金し、活動に利用させていただきます。

昨年から今年9月までに届いた書き損じ葉書は300枚以上(15,000円分以上)に上ります。これらの葉書の一部は、報告会の広報等で大切に利用いたしました。ご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。

絵葉書 プルキナファソからの便り

第47回産経児童出版文化賞受賞の小松義夫氏の作品による緑のサヘル特製プルキナファソ絵葉書も発売中です。

穀物を風で選り分ける婦人の姿が特徴的なAセット、タカバングウ村の少女も収められたBセットの2種類があります。また、今年からは一枚からでも販売しております。ご注文は緑のサヘル事務局までお願いいたします。なお、売上は活動費に充てられます。

価格400円/1セット(4枚)

100円/1枚

※ 郵送ご希望の場合、郵送料は別途申し受けます。

緑のサヘル 2006年カレンダー

緑のサヘルのオリジナルカレンダーは、おかげさまで大好評をいただいています。2006年も、世界各国の人々の暮らしを撮り続ける写真家・小松義夫さんと、季刊誌「旅行人」の編集長・蔵前に一さんのご協力をいただき、サヘルに生きる人々の日常風景を納めました。まだ若干の在庫がありますので、お電話、FAX、メールにて事務局までご注文下さい。

【目次】

- | | |
|---------------------|--------------|
| 1……表紙 | 9、10……国内活動報告 |
| 2……はじめに | 11……ありがとう |
| 3、4、5……チャド活動報告 | 12……おしらせ |
| 6、7、8、……プルキナファソ活動報告 | |

編集後記

記録的な寒波と豪雪のため、日本全国で被害が出ています。被害に遭われた方々に、心よりお悔やみ申し上げます。(菅川)／今年は未だ花粉の飛散がマイルドのようで…例年になく元気です。(佐藤)／近所の植木を見てみると、新芽が膨らんできています。春は結構近そうです。(水真)

お餞別・お祝いにどうぞ

ハケ岳農場の特産品

ハケ岳中央農業実践大学校の特産品がさらに充実しました。これまでの手作りチーズとアイスクリームに加えて、チーズケーキ、カレー、ソーセージなどハケ岳の新鮮な材料と確かな技術から生まれた品々が勢揃いの10セットです。各地への送料を含めた価格は下記の表にございます。大学校のご厚意により、お求めごとに定価の20%が当会に寄付されます。

【お申し込み方法】郵便振替用紙にご依頼様とお届け先様のご住所、氏名、電話番号、ご希望セット名と数量をご明記の上、下記までお振り込みください。

00140-9-50425「緑のサヘル」

お振り込みから到着まで10日程かかります。

		関東 信越 北陸 中部 南東北	関西 北東北	中国	四国	北海道 九州	沖縄
A	アイス10個	3,800	3,900	4,010	4,110	4,210	4,420
B	アイス20個	6,400	6,500	6,610	6,710	6,810	7,020
C	チーズ	3,800	3,800	3,800	3,800	3,800	3,800
D	アイス / ケーキ2種	3,800	3,900	4,010	4,110	4,210	4,420
E	ムース	4,930	5,030	5,140	5,240	5,340	5,550
F	ケーキ	4,930	5,030	5,140	5,240	5,340	5,550
G	カレー / チーズ★	5,000	5,100	5,210	5,310	5,410	5,620
H	ケーキ2種	3,230	3,330	3,440	3,540	3,640	3,850
I	カレー	3,580	3,680	3,790	3,890	3,990	4,200
J	チーズ / ソーセージ	5,730	5,830	5,940	6,040	6,140	6,350

内容の詳細は、同封のチラシをご覧ください。

La Forêt, C'est la Vie ! Vol. 25

編集 菅川 拓也、佐藤 裕美、水真 洋子、／発行 菅川 拓也／発行所 緑のサヘル／印刷 社会福祉法人 東京コロニー

〒101-0035 東京都千代田区神田紺屋町16番地 田澤三ビル3F TEL:03-5632-3029/FAX:03-5632-3070

HomePage : <http://www.jca.apc.org/~sahel/> E-mail : sahel@jca.apc.org